

## 24

## 表形式による基本漢方の薬味加減法の覚え方

—富士川文庫『短要方』の例—

吉川 澄美

東京都

近世日本漢方においては口授をもとにした口訣が発達し、それらを集めた口訣書が著されてきた。当時の薬物治療における知識表現法は口訣以外にも、歌括（歌訣）、科疏形式、図形的配置などの工夫が挙げられる。これらと若干異なり、むしろ現代では馴染みのある表形式によって加減法を整理したものを『短要方』に見出した。

## 1. 『短要方』について

『短要方』は、薬方（処方・方剤）とその運用方法をまとめたもので、その書名は『本邦著名医略伝』（藤井尚久著1957年）の南条宗鑑（安土桃山時代）の伝に見える。富士川本は京都大学貴重資料デジタルアーカイブで閲覧でき、他には台北故宫博物院蔵書（小島宝素旧蔵）もある。富士川本の本文は見開き20枚程度で、以下3部を主内容とする。①基本処方10種と病症（証）8種とを行列に配した加味運用表。末尾に「右十方諸病之用方也以薬種少為詮要試加添薬味者也」。②薬方21種について適応病症や加味法を記載した表。表の後に「右廿一試識病證可用加減者也」。③「諸病選用」以下99方の説明。

尚、②の末尾には、「天正三年季春於泉南書之宗鑑」、奥書に「慶長三戊戌林鐘十有七一閑齋」さらに「右者三雲施薬院家書也/元禄十五中春末五日伴重般書之/市川九雲持」とある。因みに、南条宗鑑は一鷗軒宗虎の養父で、施薬院宗伯・全宗と繋がる（小川鼎三「慶長年間の医家肖像二点の考案」日本医史学雑誌1974年）。

## 2. 基本10方の加味運用表の解読

上述の①は、見開き全体に11×9（横×縦）の区画線が引かれて、最初の行（縦見出し）は「加減」以下に「風・寒・暑・湿・虚・実・気・血」、以降の行頭のマス（横見出し）には基本10方の略称「香蘇（散）・小柴胡（湯）・平胃（散）・四君子（湯）・理中（丸/湯）・二陳（湯）・四物（湯）・建中（湯）・五苓（散）・香薷（散）但し括弧内筆者補記」が配される。右肩には薬味数、右下部には「常加朮」（香蘇）、「常加蒟」（四物）、「一方加芍」（建中）のような付記もある。そして、薬方と病症とが交差するマスには、上段に加味する薬物（一字薬名で3種）、下段に合方（朱筆で基本方から1~2種）が書かれる。例えば、「香蘇×暑」のマスには「茯苓連/香薷」（/は段区切り）とあり、その解釈は、「香蘇散を選ぶ症例で、暑のタイプには茯苓・香薷・黄連から選んで加えるか、香薷散を合す」と推定される。

さらに、「暑」を横断的に見ると、上述の加味薬以外にも篇（白扁豆）、朮（厚朴）、朮（白朮）など見える。また、「暑」に対する合方は「香薷」が多いが、「平胃（散）」では「四君」がさらに加わり、「香薷（散）」「四物（湯）」では「五苓」である。

生薬の種類に着目すると、10方の構成薬は21種（香附・陳皮・蘇葉・柴胡・半夏・黄芩・人参・厚朴・白朮・茯苓・当歸・芍薬・地黄・川芎・沢瀉・猪苓・桂枝・香薷・白扁豆・乾姜・甘草）、専ら加味に記されるのは22種（羌活・防風・藿香・荊芥・砂仁・桔梗・附子・良姜・丁香・黄連・麦門冬・檳榔・黄耆・大黃・知母・梔子・枳実・木香・沈香・紅花・延胡索・牡丹皮）なので、合計43味である。換言すると、これら限られた薬種の運用を合理的、且つ明解にまとめたのが、基本10方加味表である。

## 3. 表形式による処方運用表現の利点

80の症例タイプ毎の処方運用を文で説明すると、たとえ簡潔な口訣でも文字数は嵩張る。一方、表形式は、柔軟な文章表現と引き換えに、同項目を横断的に比較できる利点を獲得している。この10方の加味運用表は、初学者が覚えるべき基本中の基本と位置づけられ、次の階梯として②の21方や③の99方で補われている。加減法に重きを置いた薬方書としては、他にも『本方加減法』（石崎文庫）や『隨身備用加減十三方』などがあるが、表形式を含む点で『短要方』は注目に値する。